

*Opening remarks for the 24th annual meeting of
The Japanese Society of Inflammation and Regeneration
Tatsutoshi Nakahata**

第24回日本炎症・再生医学会開催にあたって

中 畑 龍 俊 *

第24回日本炎症・再生医学会総会は御案内のように平成15年11月26日(水),27日(木)の両日,国立京都国際会館にて開催の運びとなりました。本学会で長年培ってきた炎症学の伝統と研究の進展著しい再生医療を結びつけた新たな方向に大きく羽ばたこうとしている学会のお世話ができることは,大変光栄で名誉に思うと共に責任の重さを痛感しております。

長い伝統を持つ日本炎症学会が方向性を若干転換し,再生医学の学問領域と融合した日本炎症・再生医学会として新たにスタートするにあたっては,皆様御存知のように様々な議論がありました。炎症学と再生医学という一見関係のない2つの学問分野を接ぎ木するだけではないかとの見方もありましたが,学会を重ねるごとに両者が密接に関係していることが明らかにされてまいりました。炎症の治癒機転には多くの再生現象が関与し,逆に再生医療を成功に導くためには炎症に関係するサイトカインなどの多くの分子の制御が重要であることも示されました。両学問分野の研究者が一同に会して議論することにより,それぞれが蓄積してきた多くの研究成果を知り,お互いの足りない面を補いあい,新たに多くの共同研究がスタートしていると聞いています。今回の学会でも今まで以上に,交流の輪を広げていただきたいと思います。

21世紀の新しい医療の方向として故小淵首相はゲノム医療と再生医療を取り上げ,わが国でもこの分野に膨大な研究費が投下されています。既にヒトゲノムのドラフト配列が明らかにされ,ゲノム研究の重点は遺伝子情報の機能的解析に移っております。また,最近の分子生物学,細胞生物学,発生学などの発展により様々な生命現象の本質が分子レベル,個体レベル両面から明らかにされ,その成果がゲノム情報と連動した新しい治療法の開発に結びつくことが期待されています。炎症学,再生医学の分野でもここ2~3年の研究の発展には目覚ましいものがあり,次々と新しい重要な発見が続いております。

このような研究成果を臨床にまで結びつけ,実際に患者さんを対象に臨床研究を行うためには,その科学性,安全性,倫理性,社会性などが厳しく問われる時代になってまいりました。例えば,再生医療について考えてみますと,従来,薬事法に基づき安全性に対して厳密な基準のもとにできた薬の臨床治験と異なり,再生医療のほとんどは医師主導の臨床研究として各医療機関の倫理委員会をパスすれば良いという形で行われてきました。しかし,細胞を無菌的に処理・加工するための施設(CPC:cell processing center)を整備することもないまま,各医療機関の倫理委員会のレベルはまちまちで,審査項目や内容もばらばらに行われてきたこれまでの再生医療を危惧する声が増しに大きくなりつつあります。

*Department of Pediatrics, Graduate School of Medicine, Kyoto University
京都大学大学院医学研究科 発達小児科学

細胞治療の普及に伴い、米国ではFDAからヒト細胞/組織に由来する製品の製造工程における安全性と品質管理基準を示すガイドラインが施行されています。細胞をintelligent drugとして位置づけ、従来の薬の生産と同じように安全性をしっかりと担保することを求める方向に向かっています。そのため、CPCの整備、細胞処理に用いる器具や培養液、サイトカインなどのGMP化、無血清培養法や完全閉鎖系での細胞の処理法の確立、標準作業手順書(SOP)の作成と記録の保存、厳格な品質管理体制の確立など、わが国でも緊急な対応が求められています。

このような時代にあって、今回の総会では「ベンチからベッドへのエボリューションリサーチを目指して」をメインテーマに掲げ、日進月歩で報告される新たな研究成果を如何に治療にまで結びつけていくかを共に考える機会にしたいと思い、種々の企画を試みました。

特別講演1として、京都大学大学院医学研究科長の本庶佑先生には「難治性炎症の遺伝的制御」と題して世界的な免疫学者の立場から炎症の本質に迫っていただく予定にしております。特別講演2では、再生医療の根幹をなす細胞である幹細胞研究で長年世界をリードしてこられた米国南カロライナ医科大学教授の小川真紀雄先生に「造血幹細胞の臓器分化能について」と題して、最近話題の幹細胞の可塑性について御講演いただく予定です。また、教育講演では 軟組織の再生医療 皮膚、神経、心臓弁の現状、炎症と活性酸素・NO・CO、血管新生とその制御、抗体療法による自己免疫疾患制御、幹細胞と再生医学、中枢神経系の再生医学、細胞は自分の行く先をどのようにして見つけるのか? 調節性T細胞による免疫制御の8つを企画しました。シンポジウムは 幹細胞の本質を問う、生物製剤による炎症制御、炎症と再生の接点(血管新生)、国の再生医療プロジェクトの進捗状況、自然免疫と炎症の5つのテーマを取り上げました。教育講演、シンポジストをお引き受けいただいた先生はいずれもその分野の第一人者の方々であり、最近のトピックスを含むわくわくするようなお話をお聴きできるものと思います。

ワークショップには炎症関係5、再生関係5の計10のテーマが設定されました。また、一般演題として160を超える多くのご演題をお寄せいただきました。心から感謝申し上げます。ランチョンセミナーも5つ用意いたしました。

11月下旬の京都は紅葉が最も美しい季節です。どうぞ皆様多数御参加くださり、活発に御討論いただくとともに、新しい友人や共同研究の芽をできるだけ多くお作りいただきたく思います。

最後になりましたが、本総会のプログラムの企画、応募演題の選定にあたっては多くの先生方に御協力をいただきました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。皆様方の御協力により実り多い学術集会となることを願ってやみません。